

1 4	岡崎	甲山中学校	イワセ ユリ 氏名 岩瀬 友梨
分科会番号	02	分科会名	外国語教育

1 研究テーマ

自ら問いを生み出し、他者と関わり合いながらより良い自分を求めて学びを追究していく生徒の育成
～3年 Unit4「How can we help each other in a disaster?」の実践を通して～

2 研究概要

(1) 主題設定の理由

「A Mother's Lullaby」の授業で、デジタル教科書にあるピクチャーカードを用いて「紙芝居」として他者に英語で内容を伝えたり、聞いたりする活動を設定した。資料1は、そのときの生徒Aの振り返りである。下線部の言葉から、他者と関わる中で自分なりに改善点を考え、その視点を自分に生かす判断をしている。生徒Aの感想から新たな自分、より良い自分になっていきたいという思いが見られた。その後、次時に再度、別のピクチャーカードで同様の活動をした時に、生徒Aが資料2のように書いた。下線部からは、自分が納得して作った英文であり、自分の言葉として表現できていたため、達成感と喜びを読み取ることができた。しかし、生徒Aの発する英語を聞いていると、3年生で学習した表現を積極的に使おうとはせず、簡単な英語で済ませようとしている様子が見られた。この様な姿から生徒たちのより良い自分になっていきたいという思いを大切にしながら、自ら問いや願いをもち、解決または達成に向けて活動し、主体的に学びを追究し学習した英語を活用してほしいと願い、本主題を設定した。

□さんの紙芝居を聞いて、もっと短縮してシンプルに分かりやすくできるなと思った。次回は教科書に載ってる言葉をなるべく使わないで要約できるようにしたいです。

【資料1】英語科授業 振り返り①

今回の紙芝居は前回よりもスムーズに英語が出てくるようになってうれしかったです。今まで習った連語も使えたし、楽しくやれました。

【資料2】英語科授業 振り返り②

(2) 目指す生徒像

- ① 必要な情報を相手意識をもって、まとまりのある文で適切に分かりやすく書くことができる生徒。
- ② 情報を整理し、学習した表現を用いて外国籍の方に自分の伝えたい内容を更新、改善しようとする生徒。

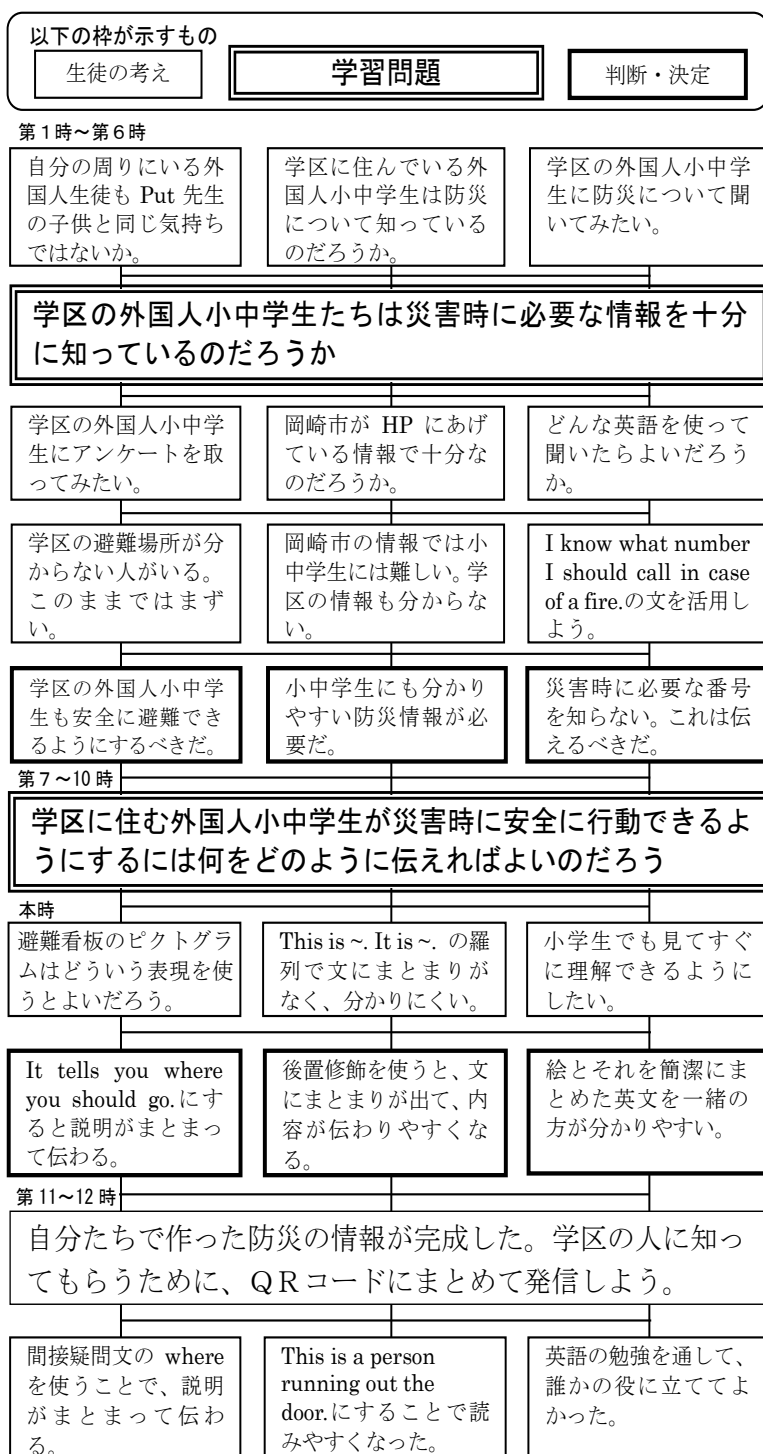
(3) 研究の仮説と手立て

- ① 研究の仮説 問題解決的な学習の中で、他者と関わり合いながら、場面や状況、相手に会う表現を選び（判断）、活用（決定）して、適切にそれらをアプトプットする場を設ければ、より良い自分を求め、主体的に学びを追求していく生徒が育つであろう。
- ② 研究の手立て
 - (ア) 手立て1 生徒の思考を途切れさせることなく、それぞれが主体的に学びを深め、追究できるよう、生徒の気づきや考え、思いをできる限り予想して授業計画を立てていく。

(イ) 手立て2 生徒それぞれが安心して活動に取り組むことができるチームを編成し、その中で自己の学びの追究をしたり、互いの意見を交換・共感したりする場を設け、学びを深めることができるようにする。

(ウ) 手立て3 生徒の英語の学びの追究を継続させるために、他者に向けてアウトプットする場を設け、自身の英語が他者の役に立った、他者に喜んでもらえたなどの自己有用感や達成感をもてるようにする。

(4) 単元構想 (12時間完了)



教師の支援と留意点

- ・ALT の家族が災害時に体験した困りごとについて、ALT と事前に打ち合わせをしておく。
- ・ALT 自身の体験談を話す時間を取り、外国人の子供達が抱える災害時の困難や不安を生徒が知り、学区に住む外国人小中学生に思いを馳せることができるようにする。 **【自己決定】**
- ・生徒の感想や思いから問いを引き出し、整理して学習問題を生み出せるようにする。 **【自己決定】**
- ・WEBQU やスクリーニングシートの分析結果を反映し、人間関係に配慮したチームを編成する。 **【安全・安心】**
- ・教科書にある「外国人市民意識調査の結果」で使われている I know where the local shelter is. のような間接疑問文の表現を伝え、何をどう聞いたらよいかわかれば生徒が **判断・決定** できるようにする。 **【自己決定】**
- ・仲間と試行錯誤しながらアンケートの内容を決めていく様子や振り返りについて価値づける声かけと朱書きを行う。 **【自己存在感】** **【共感的な関係】**
- ・教科書にある体験談やアンケートの結果を通して感じた生徒の思いを **アウトプット** する場を設ける。その上で思いを価値づけて整理し、学習問題を生み出せるようにする。 **【自己決定】**
- ・生徒が伝えたい題材を **判断・決定** できるように、Put 先生の話を取り返したり、「誰に」「どんな情報があるといいのか」と問うたりする **【自己決定】**
- ・後置修飾を使った文と使っていない文を提示し、災害時に見るためのものとして、必要な情報を簡潔に表すとよいことを明らかにしておく。
- ・アイデアが浮かばなかったり、きっかけがつかめなかったりしている生徒には自分の制作内容について **判断・決定** できるように **スクールタクト** の画面を共有モードにし、それを参考にしていることを個別に伝える。 **【安全・安心】**
- ・個々の制作がまとまってきたところで、自分の制作したものを見直し、より文がまとまったり、簡潔にできたりするか、各自の改善点を **アウトプット** する場を設ける。 **【自己決定】** **【共感的な関係】**
- ・防災情報を QR コードにまとめたちらしを小学校で配ったり、回覧板で回したりできるよう、担当者や段取りを打ち合わせしておく。 **【自己決定】**
- ・生徒が学習を振り返る際、思ったこと、考えたことを肯定し、価値づける。 **【自己存在感】**

(5) 実践

①第1時から第6時の実践

単元のはじめに、ALT が経験した地震の体験談を話してもらった。
(写真①) ALT が感じた恐怖感や不安感を知り、生徒 B は以下の感想をもった。【資料3】

総合的な学習の時間で生徒たちは岡崎市の将来について考える活動をしていたこともあり、資料3の下線部にある生徒Bの思いを全体で共有すると、生徒たちは岡崎市は現在、外国籍の方たちに向けて対策がどれくらいされているか気になり、それぞれ調べ活動を行った。



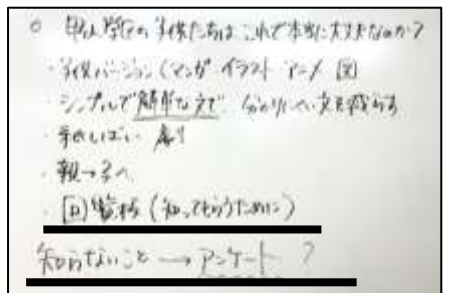
(写真①) 自身が感じた恐怖感を
生徒に伝える ALT

海外から来た人は日本に来てそんなに時間が経っていなかったら日本語がわからなくて地震とか災害が来た時にどうすればいいかなにもわからないから海外から来た人にもわかるようになにか対策をするべきだと思った

【資料3】海外の人のために何かすべきだと問題意識をもち始めた生徒Bの感想

生徒たちは調べる中で、岡崎市にも外国籍の方たちのために作られた防災のガイドブックがあることを知った。しかしその内容が自分たちのような子供が見たときにすぐに理解できるのか疑問をもち始めた。そこで生徒たちは、甲山学区の子供達は本当に大丈夫なのかというテーマで話し合いを行った。小学生の子供達でも理解できるものがないのではないかと、親子で分かっているべきではないのかなど意見が出た後、生徒Aが「自分たちで子供向けの防災情報を作って、回覧板で学区の人にそれを伝えたらどうか?」と意見を出した。

【資料4】全員もその意見に賛同し、子供向け防災情報を作ろうと気持ちを高めていった。そして学区の子供達が防災について何を知っていて、何を知らないのか聞いてみたいと思いをもち、学区に住む外国人児童生徒にアンケートをとることになった。



【資料4】生徒たちの意見をまとめた板書

アンケート作りに取り掛かると、どうやってそれを英語にしたらよいか分からないと生徒たちは問いをもち始めた。そこで、教科書の文や対話をもとに、どのように英語で表現されているのか学んだ。その後、各自で自分が聞いてみたいことを英語にし、それをチームで共有する場を設けた。

資料5は生徒Bのチーム内の対話である。英語を苦手としている生徒Bは、自分の困りごとを英語を得意としている生徒Cに相談し、修正箇所を判断し正しい文章に訂正することができた。【資料6】

1. Do you know how to get to the local shelter? yes no 2. Which number you should call in case of a fire? □ 119 □ 129 3. Do you know what need to emergency kit? yes no	1. Do you know how to get to the local shelter? yes no 2. Which number should you call in case of a fire? □ 119 □ 129 3. Do you know what emergency kit you need? yes no
--	---

【資料6】生徒Bの友達の意見を聞く前の英文(左)と後の英文(右)

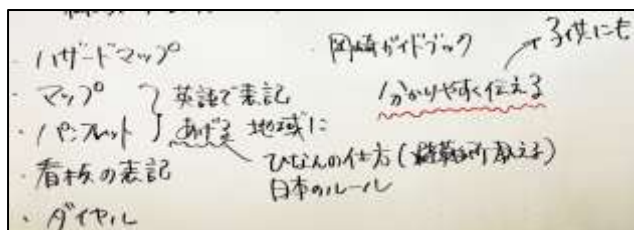
生徒B: 教科書見ながら文を作ってみたけど、できてるか自信ない。
生徒C: 2番の文はI knowが最初についてないから、you should じゃなくてshould you になると思うよ。
生徒B: たしかに。3番は? 何の防災グッズが必要か知ってますか? って聞きたいんだけど。
生徒C: 教科書の what number の文を使うといいよ。what の後ろをemergency kit にすれば何の防災グッズってなるよ。
生徒B: そのあとに need?
生徒C: うーん。多分。
生徒D: 疑問詞の後に主語、動詞って先生が言ってたから、主語がいるんじゃない?
生徒B: じゃあ、you だね。

【資料5】生徒Bのチーム内での対話

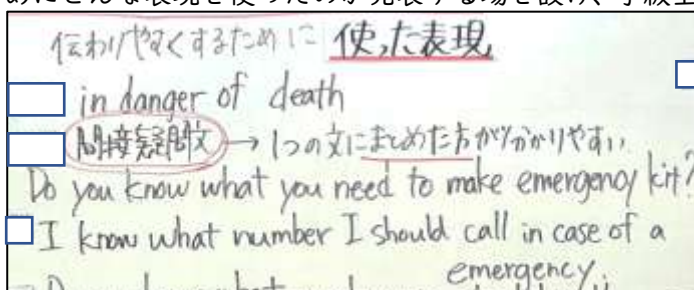
各自で考えたアンケートをチーム内でまとめ、その後学級で1つのアンケートを作り上げ、学区内の小学校にも回答の協力をお願いした。アンケートの結果を待つ間に、生徒たちはALT以外の体験談を教科書を通して知り、さらに自分たちの思いを高めていった。アンケートを集約した後、生徒たちは外国人児童生徒の現状を知り、それぞれ自分は何を伝えたいのかを考え始めた。

②第7時から第10時の実践

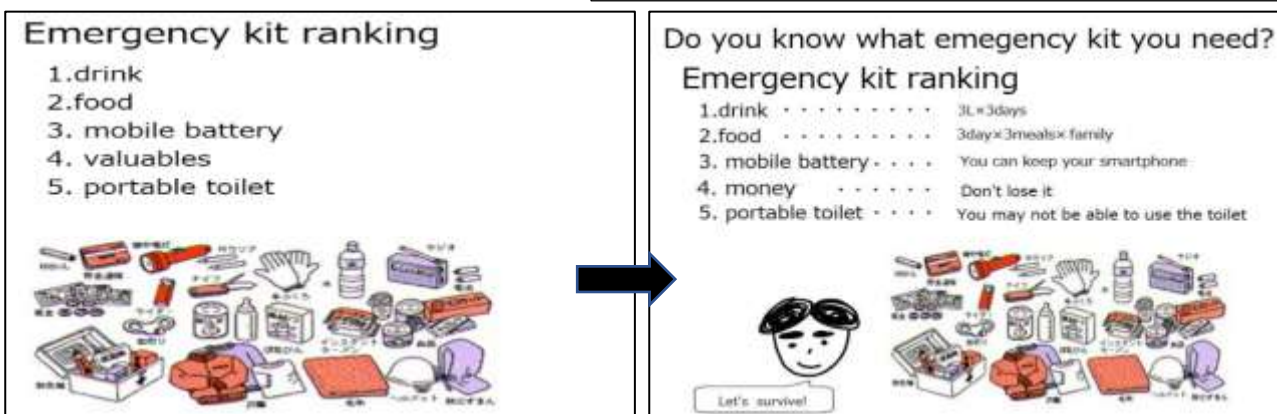
資料7はアンケートの結果をもとに、何を伝えたいのかアウトプットした時の板書である。この活動を通して、「子供にも分かりやすく伝えたい」と生徒たちは目標を定め、それぞれ防災情報をまとめる活動へと移行した。スクールタクトを共有モードにして、似た情報を書いている友達を参考にしたり、困り事を相談できるようにチーム隊形にしたりし、生徒たちが少しでも自力で取り組めるように支援した。その後、分かりやすく伝えるためにどんな表現を使ったのか発表する場を設け、学級全体で考えを共有した。その中で、間接疑問文を使う利点がある生徒が発表し【資料8】、それまで「分かりやすく」は「イラストや図を使って、簡単な英語を使う」と思っていた生徒たちが「まとまりがある文」にすると自分の思いを分かりやすく伝えられることに気づき、内容を修正していった。【資料9】



【資料7】生徒たちの思いをアウトプットした板書



【資料8】生徒たちの工夫した点を書いた板書の一部



【資料9】生徒Bの修正前（左）と修正後（右）の防災グッズについてまとめたもの

③第11時から第12時の実践

個々でそれぞれ防災情報を完成させた後、同じ様な内容でまとめた生徒同士で情報を共有し、一つのものにまとめた。当初はそれをQRコードにして回覧板で学区に配付する予定であったが、総合的な学習の時間の一環で感じたことや要望を市役所の方に伝える場があることを知り、それならば直接自分たちのやってきたことを市に伝えたいと生徒たちが考えをもつようになった。生徒たちは互いの考えをまとめながら、



(写真②) 市役所の方にプレゼンをする生徒A

市役所の方へ提案するプレゼン資料を作成した。当日は、自分たちが行ったアンケートやその結果、それをもとに取り組んできたことを自分たちの思いや願いを交えながら生徒たちは発表し、市役所の方へ伝えることができた。(写真②)

4 研究の成果と課題

(1) 研究の成果

①手立て1に対する考察

資料1、2の「もっと短縮して…」や「スムーズに英語が…」の言葉からも伺えるように、生徒Aは英語の授業への意欲は高く、自分ができるようになることに對して喜びを感じ、よりよい自分を求めようすることができる。このような生徒Aの姿を大切にしながら、生徒Aが主体的に学びを追究し、積極的に学習した内容を活用できるようにしたいと感じた。そして、そのために教師は追究過程で生まれる生徒たちの気づき、考え、思いをできる限り予想して授業計画を立てていく必要があると考え、本実践を進めてきた。

下の資料10は生徒Aが外国人児童生徒向けのアンケート作りに取り組んでいたときの振り返りである。

アンケートで聞いてみたいことはあるけど、作って見たらDo you knowばかりになってしまって、少し工夫が必要かなと思いました。でも、 <u>どうやったらもっと分かりやすくて違う聞き方にできるのかアイデアが浮かばないので、次は誰かに聞いてみようと思います。</u>	【資料10】生徒Aの振り返り①
---	-----------------

下線部の内容から、生徒Aが自身の課題に対して答えを自力で見つけることができずに困っていることが感じられた。そこで、その課題を解決するために教科書のPart1の内容を提示し、間接疑問文の表現を学習する場を設けた。資料11は、その後に書いた生徒Aの振り返りである。

英語だとなかなか文を簡潔にできず、2文とかになっていたけど、今日習ったことを使うと一文に <u>分かりやすくまとめれる</u> と思いました。 <u>これを使えば、アンケートももっと良くなる</u> と思いました。	【資料11】生徒Aの振り返り②
---	-----------------

「これを使えば…」という言葉から、教科書で学んだことが自身の課題を解決するための有効なヒントとなり、さらに間接疑問文をアンケートに取り入れようと考えを巡らせていることが分かる。

この二つの振り返りからも分かるように、生徒Aの思いに寄り添い、授業を進めていくことで、学習した内容を積極的に活用していく姿に生徒Aは変容していった。

生徒の思考が教師の予想を超え、計画を修正することはあったものの、柔軟に授業を立案していったり、単元構想を変更したりすることで、思考を途切れさせることなく、生徒Aのように追究を継続し考えを深めていくことができたと考える。

②手立て2に対する考察

生徒Bは英語に苦手意識をもっており、自分が表現する内容にも自信をもてていなかった。そこで、生徒たちが安心して活動に取り組むことができるチームをまず編成した。そして、チームの中に生徒Bと安心できる関係の生徒Cを意図的に入れ、英語を得意としている生徒Cに生徒Bがいつでも質問でき、問題解決や思考の深まりができるようにした。

資料5の対話にあるように、自分の作ったアンケートに自信がなかった生徒Bは生徒Cにその旨を相談した。生徒Cから「whatの後ろをemergency kitにすれば何の防災グッズってなるよ」とアドバイスをもらい、資料6のように自分のアンケートを生徒Bは修正することができた。資料12はその活動

の後に書いた生徒 B
の振り返りである。

資料 1 2 の下線部

生徒 C	が分からない所を教えてくれたおかげで、かなりいい感じにできたと思いました。何の～って言いたいときは、what の後ろに～をつければいいと分かりました。
【資料 1 2】生徒 B の振り返り①	

から、対話を通して生徒 B は間接疑問文に対する理解を深めていったことが分かる。はじめ「Do you know what need to emergency kit?」と書いていた生徒 B が、対話を通して「Do you know what emergency kit you need?」と正しい表現に修正し【資料 6】、さらにその後の防災情報をまとめる活動でも教えてもらった間接疑問文を積極的に取り入れていた【資料 9】。このような生徒 B の変容から、チームを編成し、その中で自己の学びの追究をしたり、互いの意見を交換・共感したりする場を設けることで、学びを深めることができたと考える。

③手立て 3 に対する考察

授業の中では、全体やチーム内などで自分の考えをアウトプットする時間を何度も設けた。そうすることで、自己有用感や達成感を生徒たちが得て、学びの追究を継続させたいと考えたからである。

下の資料 1 3 は資料 9 の活動後に生徒 B が書いた振り返りである。

外国人小学生に向けてなので、最初は文字を少なくして作りました。でも、生徒 C が最初に間接疑問文を使ってタイトルみたいなのをつけていたのが、すぐに何の情報か書いてあるか分かるし、伝えたいことがまとまっている感じがしていいなと思ったので、前のアンケートのときに使った文を入れてみました。最初のときよりも内容が伝わりやすくなったような感じがしてうれしいです。	【資料 1 3】生徒 B の振り返り②
---	---------------------

活動の中では、互いがどのようにまとめをしているのか、いつでも見せ合い、互いに聞き合える場を保障した。「文字が少ないこと」が「分かりやすい」と思っていた生徒 B が、生徒 C のまとめを見せてもらったことで新たな視点が生まれ、「情報がまとまっている」ことが「分かりやすい」と考えるようになった。そして「うれしい」の言葉から感じられるように、達成感を得ることもできた。

また、下の資料 1 4 はこの活動の後に書いた生徒 C の振り返りである。

今日は英語で災害時にやってはいけないことを理解しやすいようにまとめました。友達の手伝ったりしていると、去年や一年生の時より表現したいことが多くできるようになっていて成長を感じられました。言いたいことが言えるようになると楽しいなと思えるようになりました。普通になかなか普段のことを英語にすることがなかったので楽しかったです。

下線部の生徒 C の言葉から自分の学びが役に立った自己有用感を感じ

【資料 1 4】生徒 C の振り返り

取ることができる。また「言いたいことが…」の言葉から、英語を学ぶことで自分の思いをより詳しく言えるようになる嬉しさを感じていることも分かる。他者にアウトプットする場を何度も設けることで、英語の学習を通して、達成感や自己有用感を育むことができた。

(2) 今後の課題

生徒の思いや願いを大切に単元計画を構想し、思考の流れに沿った授業を展開していくことで、生徒たちは「地域の外国人小学生のために」という思いをもって英語での表現の仕方を主体的に追究し続けることができた。教科書にあるから学ぶのではなく、自分たちに必要な表現を求めるために生徒たちは教科書を活用し学び続けた。そして、生徒たちは自分の納得する「分かりやすく伝える」に向かってより良い自分を求め、英語の活用に励んだ。しかし、後置修飾の表現を生徒たちが活用する機会があまりなく、Unit 4 を通して習得させたいと思っていた内容に偏りが出てしまった。単元を通して教師が身につけさせたいと思っている表現を生徒たちの思考の流れの中でどのように習得させていくのか、指導の工夫が必要であったと感じた。今後も生徒たちの「問い」を大切にしながら、習得させたい言語事項をどのように生徒の思考の流れに組み込むのか構想し、英語を主体的に学び続ける生徒を育てていきたい。